

## 自律的学習の促進を目指すシラバス構築：中国の大学における日本語会話コースを事例に

張, 毅

<https://hdl.handle.net/2324/1440987>

---

出版情報：九州大学, 2013, 博士（比較社会文化）, 課程博士  
バージョン：  
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（2）

## 論文審査等の結果の要旨

本研究は、中国の大学の日本語教育、とりわけ日本語会話教育の現状を踏まえ、中国人日本語学習者の自律的学習の促進を目指す教育支援方法の1つとして、話題中心・タスクベースシラバスに基づいたプロジェクト型シラバスを構築し、授業実践のもとにその有効性を実証的に明らかにしたものである。

第1章では、日本語学習者が主体となる自律的学習能力の養成を可能とするには綿密な授業設計が必要とされている点に言及し、そうした研究の背景を踏まえ、研究目的及び研究方法、本論文の構成が述べられている。研究方法としては、基本的にアクション・リサーチを主体とする実践研究という研究手法を採用し、教育現場から問題発見、理論的根拠の探求、さらに教育現場に戻って、実践し、検討するという演繹的な研究手順が取られている。

第2章では、中国の大学の日本語教育の指針である『教学大綱』、教育現場における日本語学習者と日本語教師へのアンケート、そして教育内容を具体化した会話教材という3つの側面から日本語会話教育の実態を多面的に分析し、検討している。これらの分析を通じ、中国の大学における日本語会話教育の現状と課題を明らかにし、さらに自律的学習の促進を目指す日本語会話コースシラバスの構築にあたり、どのようなシラバスが有効性をもつのかというリサーチ・クエスチョンを設定している。

第3章では、まず、自律的学習に関する先行研究を概観したうえで、本研究で扱う「自律的学習」の定義を行っている。次に、シラバスの概念及び日本語教育分野におけるシラバスデザインの先行事例を概観したうえで、シラバスデザインの構築により自律的学習を支援することができるか、その可能性を考察し、本研究の視点と位置づけを明らかにした。最後に、第2章で設定したリサーチ・クエスチョンの解決に向け、3つの具体的な研究課題(①～③)を提起している。

第4章では、研究課題①について、コミュニケーション・アプローチの教育理論に基づいた自律的学習の促進とつながる理論的根拠を探り、シラバスの理論的体系を構築している。具体的には、コミュニケーションの強いバージョンをもとに、内容重視の言語教育とタスク中心の言語教育という2つの教育方法を取り上げ、話題中心・タスクベースシラバスという理論的シラバス案を提案した。さらに、この抽象的なシラバス概念をプロジェクト型シラバスとして具現化し、その実現可能性について考察を加えながら、自律的学習の促進にはプロジェクト型シラバスが有効であるという仮説を提出している。

第5章では、研究課題②について、第4章の課題①の研究成果を教育実践としてつなげていくため、中国の大学の日本語教育現場に戻り、学習者の具体的なニーズに合わせてプロジェクト型シラバスの内容の充実を図っている。まず、JF Can-do(日本語で「～ができる」という形式の能力記述文)を利用して、ニーズ(目標状況分析)調査を実施し、因子分析により、学習者の話す技能に関わるニーズ構造を示している。次に、より効果的な自律的学習を促進するための支援を行うため、学習者と教師を対象に自律的学習に関わるピループ調査を実施している。さらに、これらの調査結果に基づき、重慶師範大学の日本語学習者を対象とした日本語会話コースを取り上げ、1学期間にもわたる、プロジェクト型シラバスを作成している。

第6章では、第2章で取り上げたりサーチ・クエスチョンの改善策の実践として、課題①と課題②の研究成果に基づき、「プロジェクト会話」コースを事例として設定し、実験的な授業実践を行っている。さらに授業実施後、量的調査と質的調査の結果を分析することにより、課題③の自律的

学習を促すプロジェクト型シラバスの有効性を検証している。

第7章では、各章の内容をまとめ、本研究の意義及び今後の課題について述べている。

本論文では、中国の大学の日本語会話教育における自律的学習をどのように進めていくかという課題に対し、アクション・リサーチという研究手法をもとに、コースシラバスモデルを提示し、実践・検証により、その有効性と方法論の限界を示している。特に、学習者の主体的な授業参加を促す具体的な指導要素として、学習記録ポートフォリオの作成や自己評価・他者評価といった自己管理の意識を促すための評価方法、自己管理と関わる学習ストラテジーの指導、さらに自律的学習を促進するためのリソースの提供や環境の整備といった点をそれぞれの要素の限界性を踏まえつつ、具体的に提起している。すなわち、自立的学習促進のための教育モデル作りの指標を極めて具体的に提示している点が言語教育の実践研究に資する業績として評価される。

以上の点から、調査委員会は本論文が博士（比較社会文化）の学位を授与するにふさわしいと判断した。

試験又は学力確認の結果の要旨

甲 第 号 氏 名 張 毅

調査委員  
主査 松永 典子  
副査 井上 奈良彦  
副査 志水 俊広  
副査 松村 瑞子  
副査 山本 富美子

試験又は学力確認の結果の要旨

2014年2月8日午前11時より午後1時まで、九州大学西新プラザ小会議室において、張毅氏の博士論文公開審査を開催した。最初に申請者が主論文の概要を説明し、続いて、質疑応答が行われた。申請者は質問に対し、的確に回答し、説明を補足した。

以上の公開審査の結果に基づき、申請者は博士（比較社会文化）の学位を授与されるものとして十分な学力を有すると判断された。よって、調査委員全員一致で申請者が最終試験に合格したものと認定した。